『会津農書』の完成

与次右衛門が、自分で調べたことや、ためしたことを、帳面に書きとめるようになってから、十数年がたちました。書きとめた帳面は、何さつにもなりました。与次右衛門の胸の中に、いつしか、大きな夢がふくらんできました。

ある日、与次右衛門は、その帳面をふろしきにつつんで、新城寺の和尚さんをたずねました。

「和尚さん、相談があって来ました。」

「こまりごとかね。」

「いや、私も、肝煎として村のことを考えながら、しごとをしてきましたが、いま、ぜひやっておきたいことがあるのです。」